龍　南

新入生諸君を迎ふ

處女の瞳の樣に晴れ晴れしい蒼穹に、濛々と立ち昇る阿蘇の煙が日毎〳〵に白く際立つて火の國も瑤珞の秋に入り、武夫原の靑草を訪れる北來の金風には漸く淅瀝の聲を聞いて、全てが筋張と沈痛の氣に溢れんとする。

かゝる朝龍南は新しく三百の英才を迎へた。淸純な理想と爛煥たる希望に輝く諸君の風姿は寔に愉悅歡喜して迎ふべき龍南の新鋭である。然し有りの儘に告白すれば我々は毫も欣舞抃躍すべき程の情に襲はれなかつた。何と云ふ冷寂な仕打だらう。けれども夫は我々の咎では無い。諸君と我々とは必竟一年間唯公式的な無愛想な視線を煉瓦壁の側らで交はすに過ぎ無い運命に囚れて居るんでは無いか。表層的な眞情の籠らぬ交雜からどうして高潮に達した衷心からの懇情が湧起しよう。若し我々にして諸君と起臥を全うし、全人格的の交りに渾然たる融合一致のユウトピアを現出し、やんごとなき一歲の生を悦惚し得べき境涯にあらしめたならば、至淨至福の悅樂に感激の泪を灑ぐ可き此の朝、斯くも冷酷な姿に甘んじては居なかつたらうに。

されど、噫——

武夫原に日の入る夕も、白草原に雲の飛ぶ朝も、諸君は單に諸君であり我々は唯我々たるに過ぎ無い。諸君は即ち我々であり我々は是れ諸君であるべき同心一体の境地に、身ぬちを廻る赤い血と血の交流を爲すには余りにお互は寮舍の壁で隔離せられて居る偶然にか必然にか、仝じ路を仝じ方向に辿り行く諸君と我々とが、一語の慰安も、片頰の微笑も交さずして、唯默々と左側と右側を進んで居る。淋しい姿。呪はしい姿の極みである。諸君、お互の間に横はつて居る此の深い暗い溝渠を、どうがなして埋めるか又は其上に橋を渡して、心からなる抱擁に染々と火の國に學ぶお互の幸を祝福し、永劫に消ゆべうも無い靈感のスタンプを、小鳩の樣に天眞な胸に碇つかりと押捺す可く努力しようでは無いか。

君人の渇望の王國――其王國の黄金の扉を開いて、靜かに長い昔よりの憧憬れの殿臺に歩み寄つた諸君は、痛ましくも幻滅の慘風に吹き捲くられて、麗しく芳醇なりし幾多の夢を酷くも搔き破られたであらう。曾つて諸君であつた我々も、諸君の今日であつた日に於て全じ樣な悲哀に慟哭せねばならなかつたのだ。

遮莫諸君、初めて殿堂の内部を覗つた其の瞬間の不祥な印象より、直ちに龍南を否定する決論を宣言しようとするのは余りに早急であり、余りに輕擧である。一瞬時の觀察によつて造作なく其價値を論斷される程、夫れ程龍南は單簡では無い。彈力に溢るゝ諸君の腕を振ひ、握り占めた白金の槌で、壁の隅々迄で殘る隈無く叩いて見よ、何處かで屹度天來の妙音に接するに違ひ無い。移ろひ易い青春の三年を託する此の龍南の生活をして意義あらしむるも無からしむるも、一に諸君自らの覺悟と努力の如何に存する。諸君は抑も那邊に妙音を聽取せんとするか。

火の山――生ける煙――

夏されば月見草の黄葩夢と綻び、冬されば黄草に赤光の沈む武夫原の東十里、其處に嚴然と聳り立つていみじき壯美を、ゆくりなくも裾野に遊ぶ男の兒の驚異に瞠つた瞳に投ずるは、不斷の創造と、永劫の進化を具象する彼の阿蘇の靈峯である。

寔に龍南の意義は阿蘇に在る。阿蘇こそは諸君が三年の生活の羅針盤として、一點の遜色無き至貴至重の寶である。

龍南の士氣日々に萎微沈潛し、瘴癘の懦氣託摩ケ原を覆はんとすれど、はろばろと眼を野の彼方に放てば、靈峯阿蘇からは悠々千載を超ゑて尙も變り無き白煙が紺青の大空に渦卷き昇つて居る。憂ふるな、源泉は未だ涸渴し無い。實にや阿蘇こそは龍南士氣の源泉である。

懊惱の晨は阿蘇を仰げ、憤懣の夕は蘇山を望め、解決の鍵、慰撫の盃は、唯彼の靈峯と交感する時に於てのみ諸君の掌上に在るであらう。阿蘇こそは男の兒の心深く喰ひ入れる心の疾患を癒やす靈驗あらたかな妙藥である。

火の山――生ける煙――

そして龍山の松籟と白河の奔湍が奏する不退轉の交響樂――

恁うした周圍に包まれて、雄々しくも快く不斷に展進し常住に躍進し行く自己の戰姿を靜かに凝視する時、諸君は初めて龍南生活の奥底に燦然と輝ける意義の寶珠を見出すであらう。細長い陋屋に顧慮するな、小智小技巧に貴い生命の芽生之を傷つけられるな。素朴な火の國の自然は榮光を荷負へる若人の來迎を翹望して居る。自然へ走らう、環境と抱合しよう、お互に、赤血球の躍動して居る掌を合せ、敬虔不二の念慮を以て、東の方、壯美悠久な阿蘇の姿に、讃喜渴仰の氣高き涙を献じよう。其時。十方世界に燦爛たる大日輪はうらうらと龍南の若人の頭上に昇り行く。

龍南の識者に

塵埃の多い熊本の秋は殊に匆々として逝つた樣な氣がする。初冬に入つて漸く落ち着いて來たらもう試驗が目睫の間に迫つて來た。惚惶として時の歩みは過ぎ行く。今年も殘り少となつて一月足らずして又一つ年を加へる。既往を顧み未來を思ひ誰しも無量の感慨を懷く時であるが蕭篠たる冬枯れの武夫原を低徊する時過去三年の龍南生活が頭の中を掠めて行く。そして思はず身慄ひするのを禁じ得ない。

「櫻の杖が細つて行く。兵隊靴が影を潜める燒杉の下駄が桐の下駄に、白三筋が鳥打帽に變つて行く」と慨慷した風雨樓生の言は不幸にして事實である。「生粹の五高ッ兒は日一日と減つて行く。龍田山の時代は過ぎて通町の時代新市街の全盛時代となつた高きより低きに北より南へ是龍南士風推移の傾向である」と云つたのも或は傷ましい半面の事實かも知れない。兎に角龍南の士氣は廢頽しつゝある。激烈なる音響と强裂なる色彩とが極度に使用される近代文明に龍南の別天地が侵蝕されつゝあると云ふ證左は少くない。龍南士氣の廢頽。剛毅朴訥の衰萎――それは風聲鶴淚落人の身に秋風の響く樣に吾人の耳朶を打つのである――これ果して何に起因するものであらうか。吾人は「野氣」が減つて行くに因るものとなす。

昔は和魂漢才と云つた。其後には和魂洋才とでも云

ふべき時代であつた。それは模倣は遂に模倣である。吾人は模倣を以て満足すべきでない。今や和魂和才の時代である。即ち野獣的肉体を獨創の文化と加ふるに野氣を持つた人間の時代である。寧ろ斯の如き人間のみの時代であらねばならぬ。人間所詮は時代の兒でありたい。否寧ろ時代其物が吾人のものであらねばならぬ。換言すれば龍南人士は須く時代の龍兒であらねばならぬ。

龍南士風の廢頽！こはいみじくも撞き出された警鐘である。繰り返して云ふ。而してそは傷ましくも事實である。吾人は腐れペンを振つて龍南識者に訴へんとするのである。吾人は時代の經營者でなければならぬと云ふ力強い自覺と確信と又微かな誇とを感ずるのである。同時に省みて多少心細い氣もする。幾分の哀愁を感ぜずにはゐられない。目をあぐれば時代の人——野獣的肉体と獨創の文化と野氣とを完全に併有する人——は極めて寥々たるものである。幸なる哉されど少くとも吾人は斯る時代の人たり得べき能力を持つてゐる。吾人は自己の力で以て三に〕て其一を得られないことはない。吾人はこれを遂行せんとする最も平易にして趣味多く且つ最も健なる道はこれを無窮の自然に求め無邊際の自然を材料とすることにあると主張してやまない。即ち山に攀ぢ野に歩き川に至り谷に逍遙するに強い者は強い者だけに、弱い人は弱い人相應に、知識ある人ない人おのかゞし相當に得る効果は今更書くだけが野暮である。されどこれに依つて著しく野氣を養ふと云ふことは特に注意すべきである。野氣——先程から勝手に此新熟語を使用してゐるが——此語の意味たるや恐くは大方の龍南人士の胸底に直覺的に響くものと思ふ。或は蠻氣とも云へよう。時には野趣とも野心とも彈力性とも云へよう。若い牡牛の樣に Wild であつた先輩が鬱勃の氣に堪へかねて龍田山上から「取ッテカマウ」と咆吼したあれは野氣である。試みに高等學校評判記を開くとこんな事が先づ吾人の目を惹く「……私の好きなは竜田五高の白三筋……」よく知られた平凡な歌であるが吾人五高生には會心の笑がひとりでに起るのである。自ら豪語して「私の好きなは云云」と云つた當年の人の矜持と自覺、あれは將に野氣である。擧げ來れば幾らでもある。

ルッソーの「自然に歸れ」と云ふ力强い叫聲が近代思潮を惹き起した曉の鐘であつた。人はすべてを放擲して本來の無一物の境涯に立歸りやがて雄々しくも踏み出した第一歩は即ち彼獨自の境地である。新聖タゴールはかう云つてゐる。大自然の胸懷に育まれた昔の印度人は自然其者と融合することを究極の理想とし又實際其理想の實現に努力した。何と云ふ雄大な考だらう。吾人は吾人の全部を暫く放擲して大自然の不斷の默示に耳傾くる時。茲に吾人の獨自の境地が開けるのである。小さい乍ら吾人は自然と配合し吾人の胸中に宇宙が開けるのである。花が散るのを花が散ると見るのは自然科學者の態度である。何故に花は散り何をか語らんとすると考ふるは哲學者の見である。散り果てた後の哀れより散らない前の淋しさを思ふは詩人の胸中である。對する自然其者は同じく一つであるが。見る人の心々は一樣ではない自然は永久に默として語らないのである。而かも吾人は常に自然の聲を聞くのである。一寸壓されれば二寸飛び上るてふ彈力性は伸びむ〳〵とする吾人青年にのみ許された誇らかな特權である。折に觸れ時に接して含蓄された此の彈力性は時に薫しては萬朶の櫻となり凝りては百錬の鐵となるのである。何の束縛をも感じない奔放な吾人青年は若い生命の朽ちなん限り感激と光明とに燃えて勇ましく進軍の歩武を進めんとするのである。

かうした意味から吾人は山嶽會を組織した。山重り谷隔り吾人の理想は高且遠である。疲れては消ゆる巷人の群をはなれて茜さす靈峯の絶嶺に巔の神と共に顧みて崇高な一瞥を彼れの上に投じる時吾人の若い生命は育まれるのである。（白水邊人）